

# ドル/円相場のトレード戦略

## 【ドル/円 週足】



### ■中期展望

昨年 2018 年のドル/円相場は、当初想定していたように 2017 年と同様のレンジ相場が継続しました。

年間の値幅は 10 円を下回り過去最少、2017～2018 年の 2 年間を通して値幅は 14 円に満たず過去最少となり、市場のボラティリティから収益を得ようとするディーラーにとっては極めて厳しい環境となりました。

その大きな要因としては、絶好調だった米国の経済状況にもかかわらず、年初に米国の政策への不透明感からドルが下落したこと、そして年末には米金利のフラットカーブ化やそれに伴う米国株式の大幅下落、米中貿易摩擦の激化などのリスク要因が相次いだことでドルの上値が抑えられたことが挙げられるでしょう。

米国経済が強調であり利上げ予測が続くためにドルロング・ポジションが蓄積される中でもドルが大きく上昇しないという現象は、ドル高派にとって想定しにくい状況であったと思われます。

そのため、本年年明けの 1 月 3 日に 108 円を割り込むと損切りのドル売りを巻き込みながら、ドルが短期に 4 円以上下落するという動きが引き起こされました。

その後、1 月の米 FOMC では声明文から追加利上げのバイアスが削除され利上げ継続という政策スタンスが大きく変わったことにより米国株式およびドルは持ち直しました。

また、米経済指標は好調を維持するものも多く、良好なファンダメンタルズのなか金利が低位安定

# ドル/円相場のトレード戦略

するという適温相場が再び始まったとの期待が強まりました。

さらに6月のFOMCで米国が利下げ方向へ政策変更したことが明確となり、実際に7月のFOMCでは10年ぶりの利下げが実施され、追加緩和への期待も大きいことからドル安が進みました。

また、米国が9月から対中追加関税の実施を発表したことで、米中貿易摩擦値の警戒感がたかまり、ドルは104円台まで下落しました。

ただし、米国の追加利下げ観測が強まるものの、米国景気はまだ成長を維持しており、ドルが一方的に売り込まれる経済状況にありません。

また、9月のFOMCで利下げ幅が限定的となる可能性が示されたこともドルの下値を支える要因となるでしょう。

したがって、105円水準で相場は底打ちし、ドルの戻りを確かめる局面に入ったものと思われ、108円台で止まるか、110円を確かめに行くのかが注目されます。

## ■短期展望

先週は、107円後半でスタートした後、中国の通商交渉団が米農家視察を中止したことや9月米消費者信頼感が市場予想以上に低下したことで、一時106円台に下押したものの、週央から上昇に転じ、週末には108円台を回復する動きとなりました。

今週は、週末に米中通商交渉や米雇用統計を控え動きにくい相場となりそうですが、交渉進展期待も根強くドルの下値は堅くなることが予想されます。

したがって、107円半ばから108円半ばをコアレンジとし、108円半ばを上抜いていけるかを見極めることとなりそうです。